

焼岳の火山活動解説資料（令和8年4月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

山頂付近の微小な地震活動が継続しています。GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。山頂付近の噴気の状態に変化は認められません。

山頂付近の地震活動や地殻変動に加え、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられるなど、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきていますので、引き続き今後の火山活動の推移に注意が必要です。

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震の発生状況（図1-②③、図2、図5-④⑤、図8~10）

山頂付近の微小な地震活動（焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震）が継続しています。

火山性微動は観測されていません。

【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

23日に山頂の西側のやや深いところを震源とする地震が一時的に増加しました。この地震活動に伴って、噴気活動や山頂付近の地震活動に変化は認められませんでした。

・噴気など表面現象の状況（図1-①、図3~4、図5-①~③、図11）

噴気活動に特段の変化はありません。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約4km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも100m以下で経過しています。

・地殻変動の状況（図1-④~⑥、図6~8）

GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年5月分）は令和8年6月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、東京大学、名古屋大学、京都大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

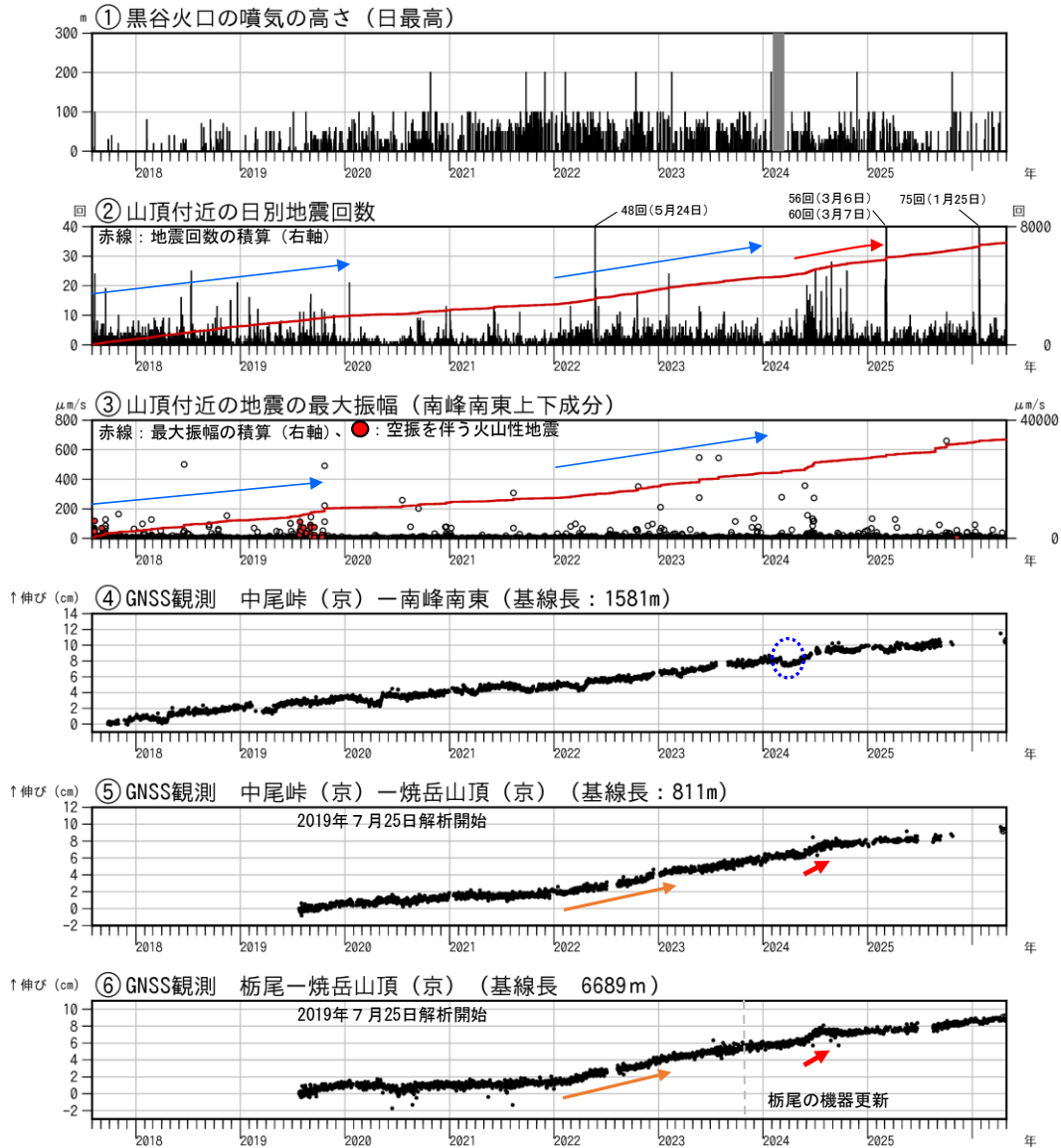
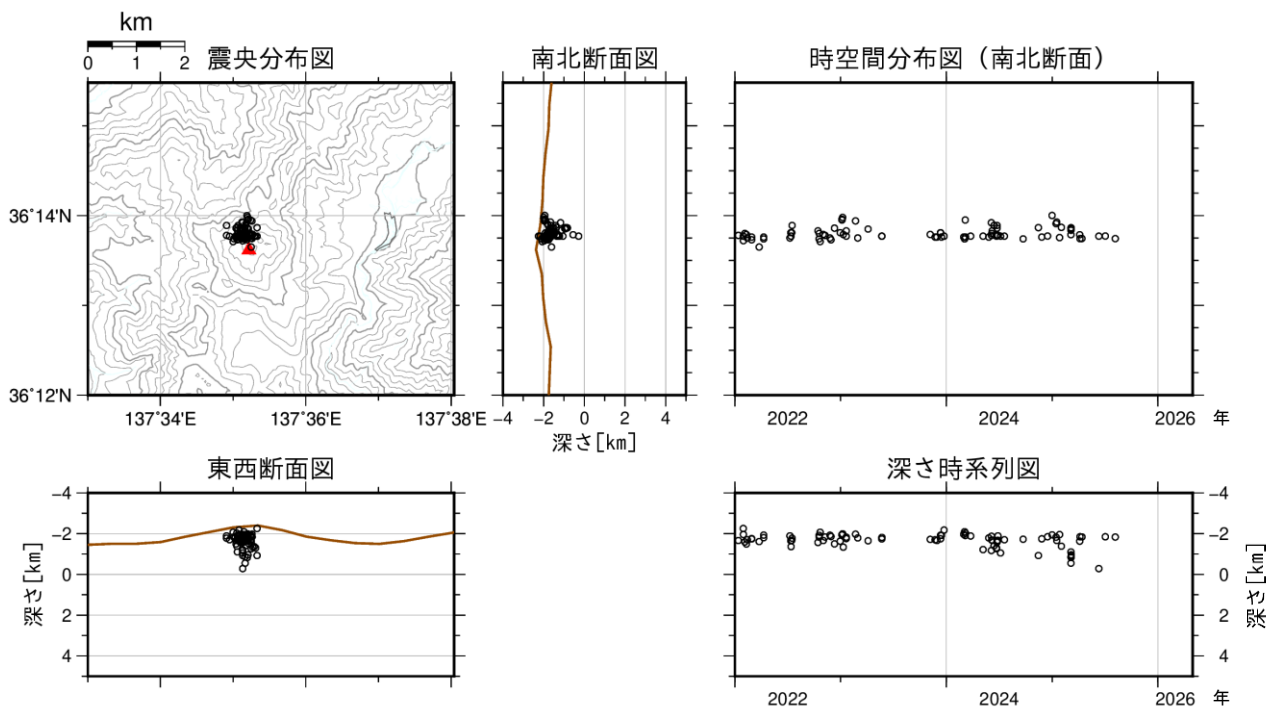


図1 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2026年4月30日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図2も参照。

- ① 灰色の期間（2024年2月5日～3月14日）は欠測を示します。
- ④⑤⑥は図7の基線⑥⑧③に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。
- ④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

- ・ 黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていきます。
- ・ 山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています（②）。
- ・ 2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。2024年5月下旬から2025年3月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました（②赤矢印）。2026年1月下旬に、一時的に地震回数の増加がみられました。
- ・ 山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています（④⑤⑥）。
- ・ ⑤⑥の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（橙矢印）。また、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。



○： 2022年1月1日～2026年3月31日
 ○： 2026年4月1日～2026年4月30日

図2 焼岳 山頂付近の地震の震源分布図（2022年1月1日～2026年4月30日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震のことです。

観測点の稼働状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

- ・震源は、山頂付近の深さ0km（海拔0km）以浅に分布しています。
- ・今期間、震源が求まる地震はありませんでした。

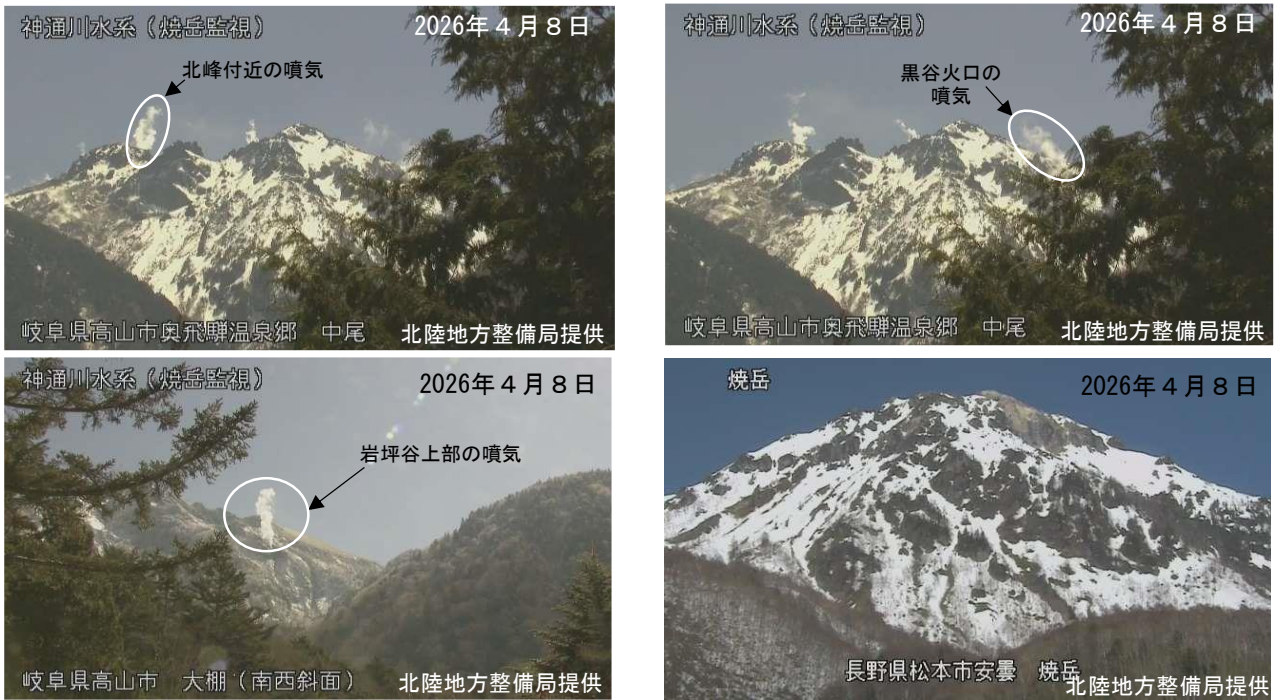


図3 焼岳 山頂部及び南西斜面の状況
 (上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ)
 ・噴気活動に特段の変化はありません。

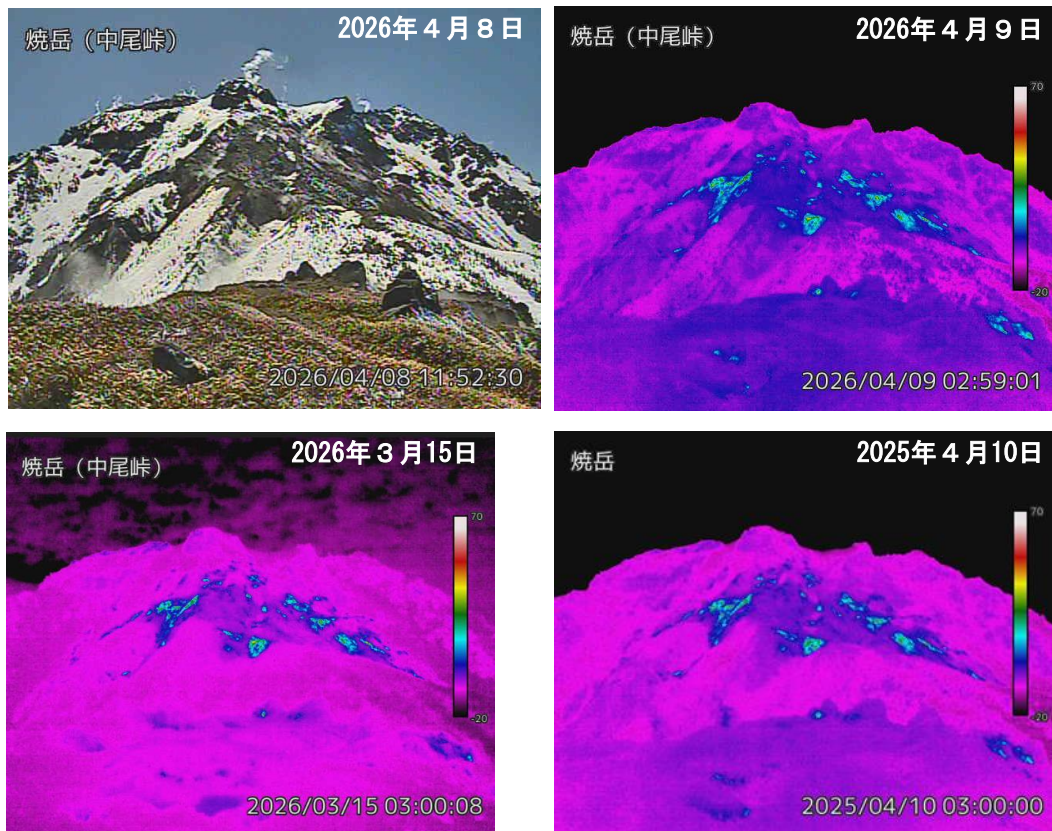


図4 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像
 撮影場所と撮影方向は図11を参照。
 ・前月（左下図）及び前年（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。

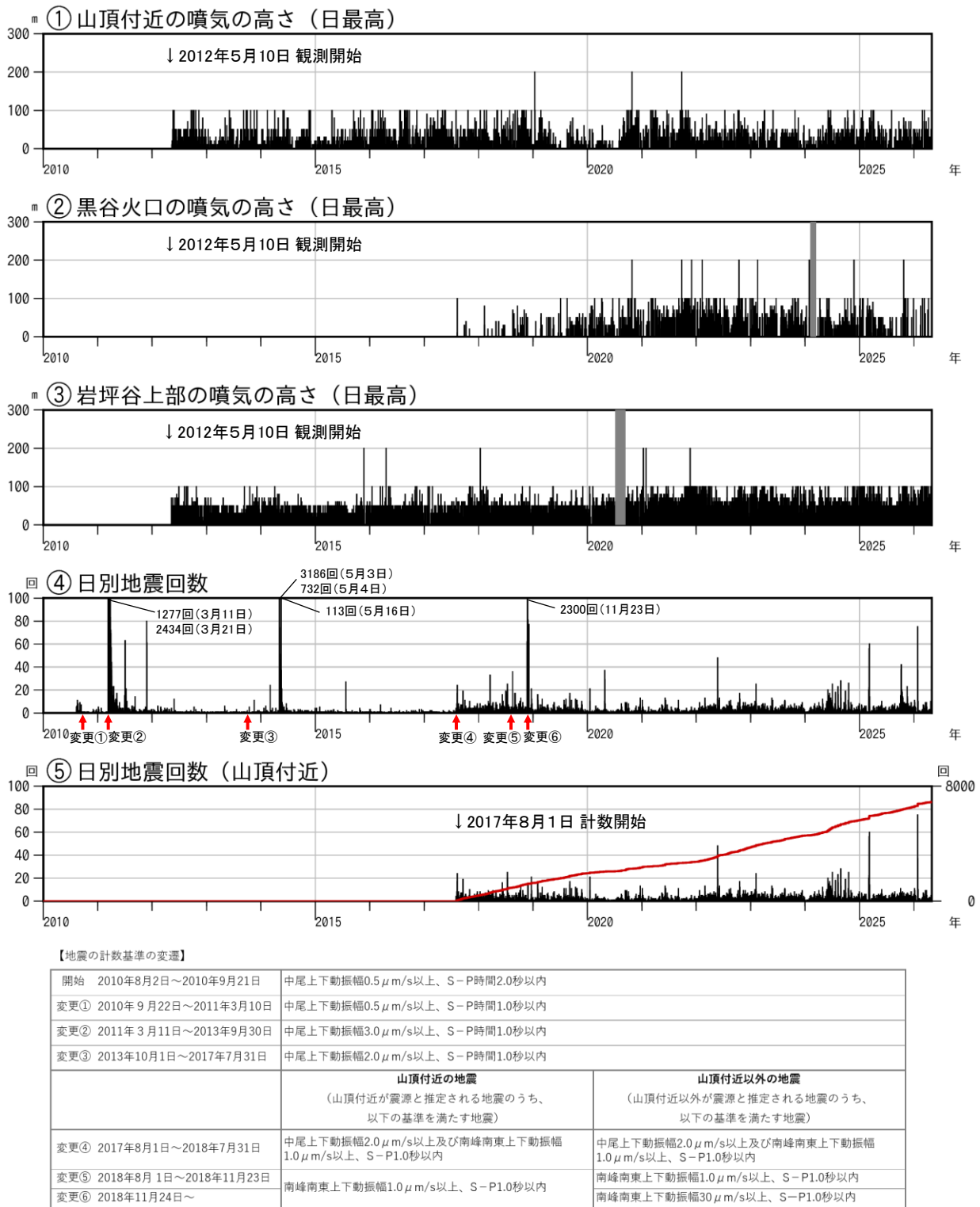


図5 焼岳 噴気の高さと地震回数の推移(2010年8月2日～2026年4月30日)

- ②黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020年7月7日から9月10日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ④2017年8月1日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。
- ⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。
- ・黒谷火口では、2017年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

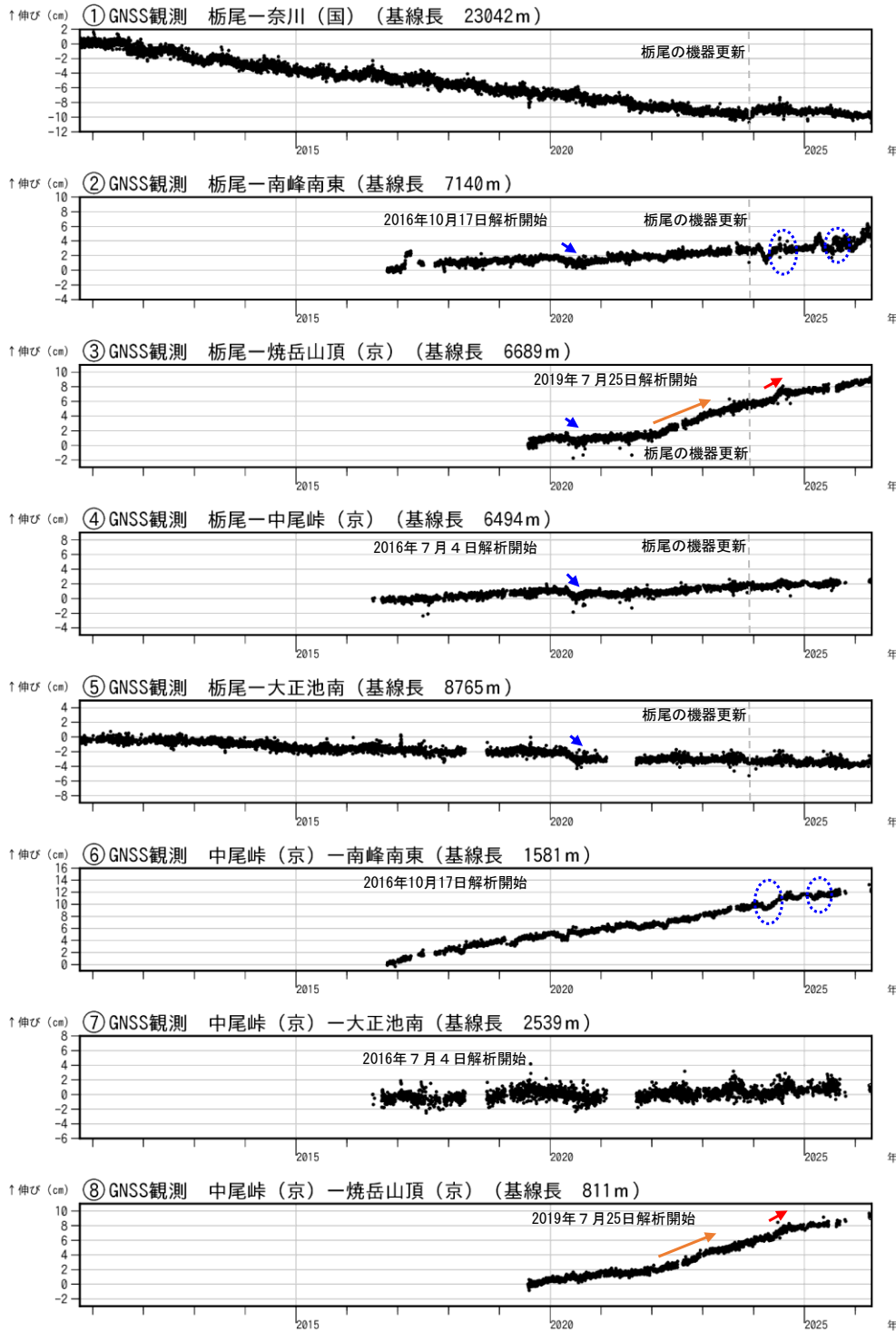


図6 焼岳 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月1日～2026年4月30日）

- ・③⑥⑧の基線では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な伸びの変化が継続しています。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（橙矢印）。また、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。
- ・②～⑤の基線では、2020年5月下旬頃から2020年7月頃にかけて、2020年4月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

（前ページ 図6の説明）

図7のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。

2023年10月17日の栢尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。

②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

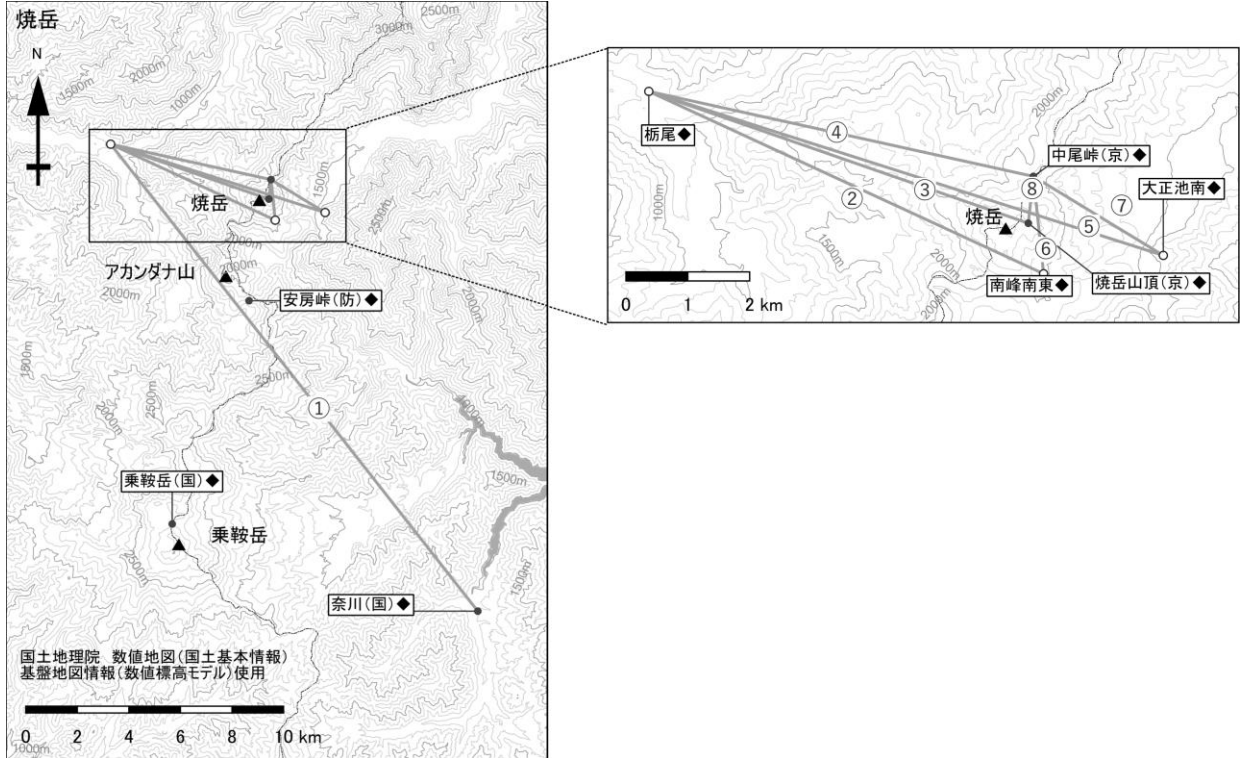


図7 焼岳 GNSS 連続観測点配置

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図6のGNSS基線①～⑧に対応しています。③⑥⑧は図1のGNSS基線⑥④⑤にも対応しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（京）：京都大学

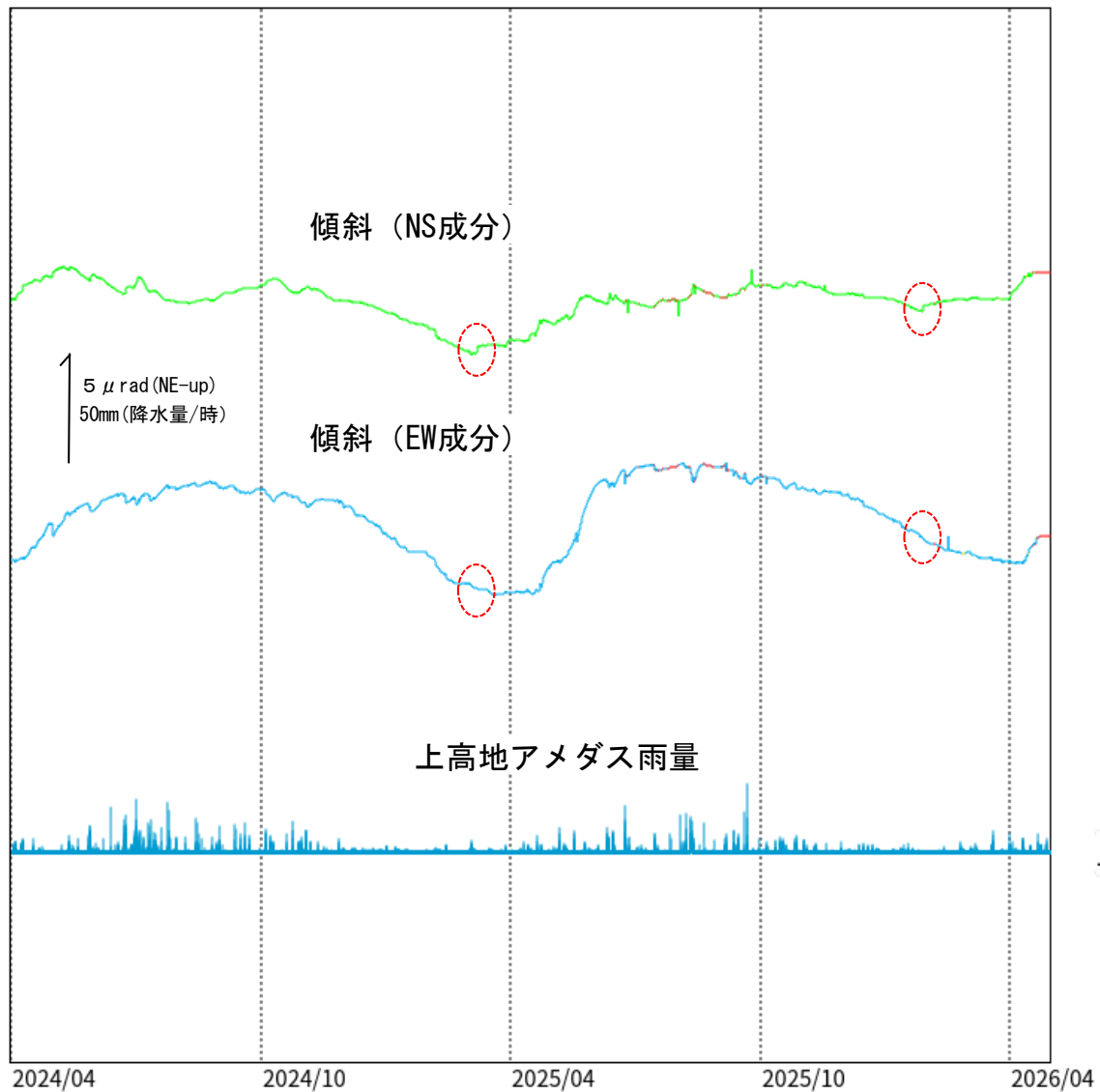


図8 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ及び日別地震回数
 (2024年4月1日～2026年4月30日)
 赤線部分は欠測を示します。

- ・傾斜計による観測では、2025年3月8日、2026年1月25日及び1月27日に山頂方向上がりを示すわずかな傾斜変動（赤破線）が認められました。その他の期間は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

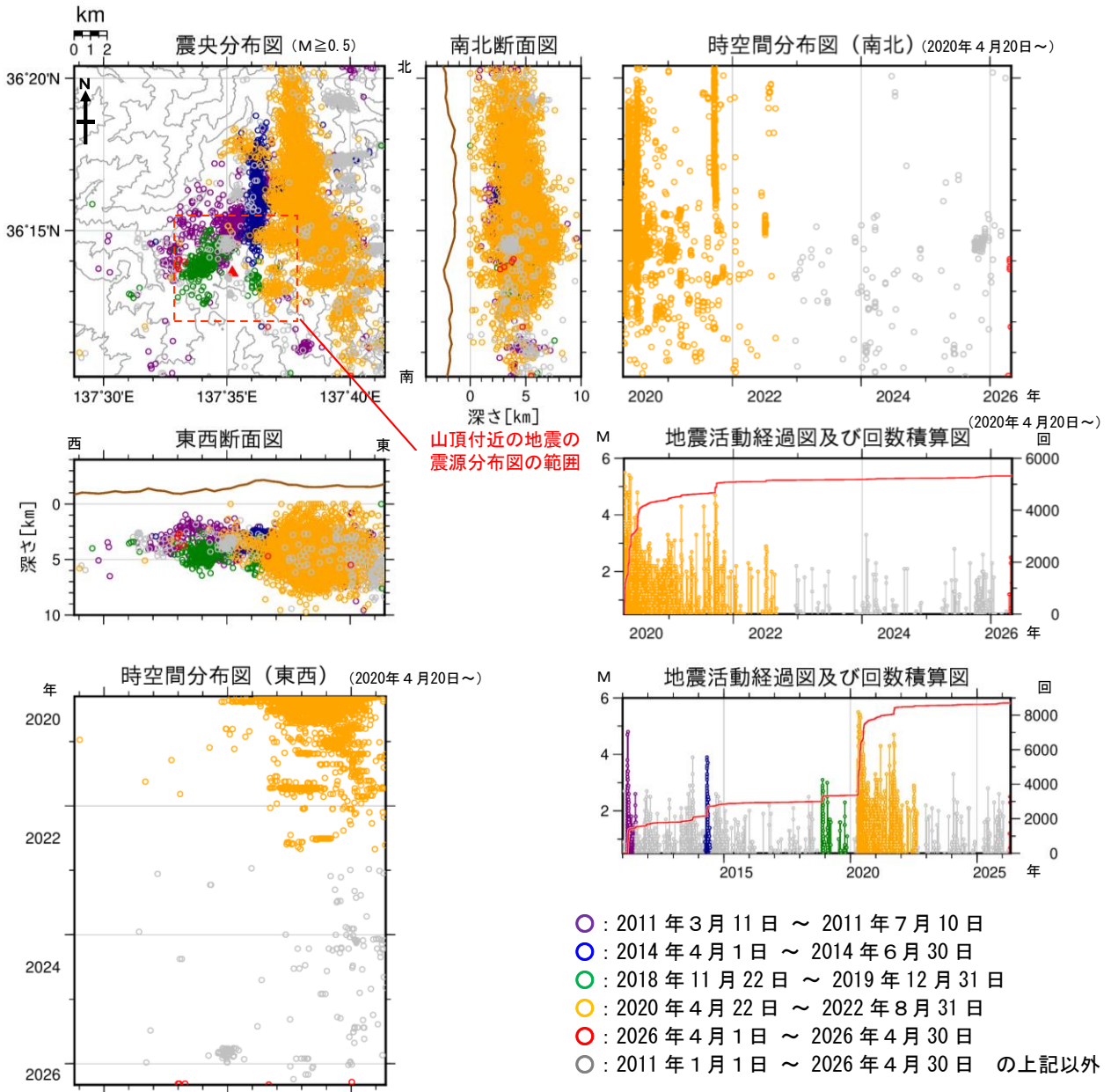


図9 焼岳 広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年1月1日～2026年4月30日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数（右軸）を示しています。

震央分布図中の赤破線領域は、図2で示す領域に対応しています。

- ・ 焼岳周辺では、2011年（紫丸）、2014年（青丸）、2018年から2019年にかけて（緑丸）、2020年4月から2022年8月にかけて（橙丸）、地震活動の活発化がみられました。
- ・ 23日に山頂の西側のやや深いところを震源とする地震が一時的に増加しました。なお、この地震活動に伴って、山頂付近の地震活動に変化は認められませんでした。

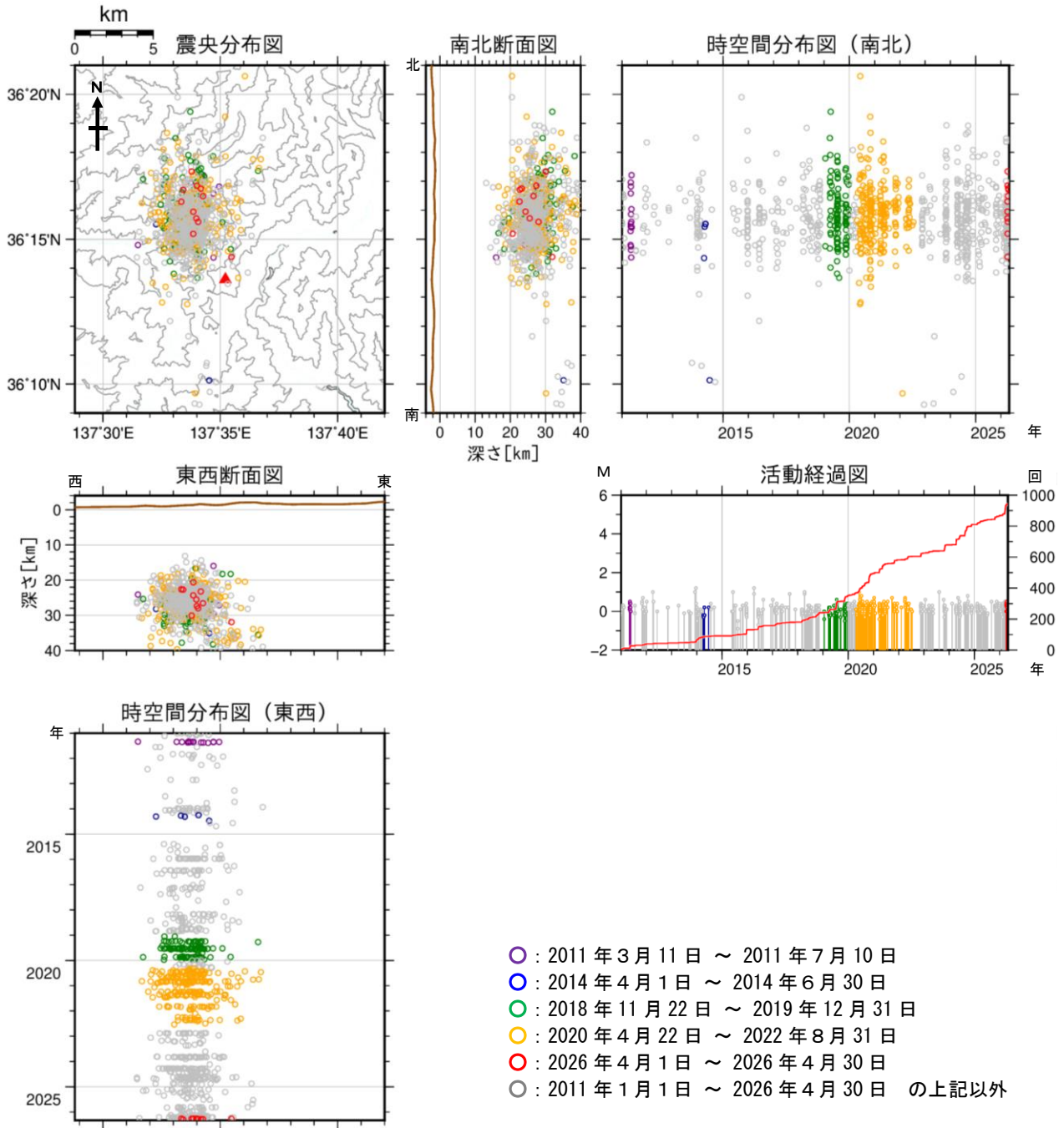
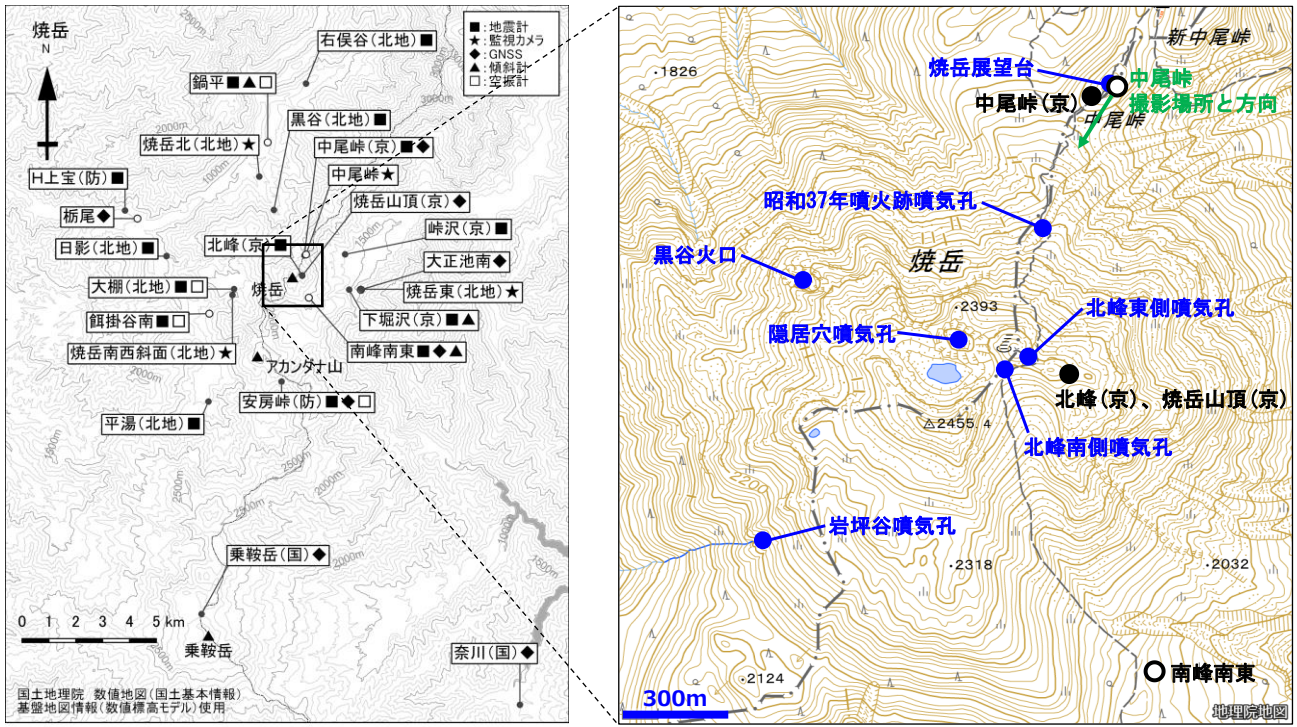


図10 焼岳 広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年1月1日～2026年4月30日）
 広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

- ・焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震は3月中旬から4月上旬にかけてやや増加しましたが、その後は低調に推移しています。この活動に伴う焼岳山頂付近の地震活動の活発化はみられません。
- ・図9に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加することがあります。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

図 11 焼岳 観測点配置及び噴気孔位置
 右図中の緑矢印は図 4 の撮影位置と方向を示します。